

追悼記事

故 神谷 齊先生を偲んで

庵原 俊昭

国立病院機構三重病院 院長

2000年(平成12年)に第48回日本ウイルス学会学術集会の会長をされた国立病院機構三重病院名誉院長神谷齊先生は、敗血症により平成23年2月22日御逝去されました。神谷先生と一緒に長年研究を続けてきた門下生を代表して、お別れの言葉を述べさせていただきます。

神谷先生は1939年8月18日のお生まれで、高校を卒業するまで安城で過ごされました。1964年三重県立大学医学部を卒業後、1965年井澤先生が主宰されている三重県立大学医学部小児科に入局され、1969年に小児白血病の免疫療法の研究で学位を授与されています。

1970年代に入り小児白血病の治療成績が向上し、白血病は寛解に入ったが、麻疹や水痘でなくなる子どもがでてきました。このため井澤先生のアドバイスもあり、1974年から白血病患児にワクチンを接種する研究を始められました。ワクチン研究を始めるにあたって井澤先生が神谷先生に伝えられた言葉「できないと思うことを追求するのが研究なのだ」を、私は神谷先生からよく聞かされました。

1974年当時、「免疫不全者に生ワクチンを接種することは禁忌」が常識でした。しかし、白血病患児の免疫を研究されていた神谷先生は、白血病患児の免疫状態を評価しながら接種すれば、安全にしかも効果的な免疫がつけられることを、麻疹ワクチンや水痘ワクチンを用いて証明されました。この研究を行うにあたり、最初に相談されたのが大阪大学微生物病研究所(阪大微研)麻疹部門の奥野先生であり、奥野研で水痘ワクチンを研究されていた高橋先生との出会いがあり、上田先生、山西先生、白木先生とも巡り合いました。

私が神谷先生と一緒に研究を開始したのは1976年ですが、この頃学会で白血病患児への水痘ワクチン接種成績を発表すると、あちこちからワクチンの危険性を指摘する声が上がったことを今でも思い出します。その後、白血病患児への水痘ワクチン研究はPediatricsに認められました。また、この頃水痘の免疫を簡単に調べられる方法として、遅延型皮膚反応を用いた水痘皮内テスト(第一世代)を高橋先生と開発されました。この水痘皮内テストは、その後藤田保健衛生大学浅野先生により改良され(第二世代)、現在市

販されています。なお、神谷先生が提唱された免疫状態を評価しながら免疫不全者に生ワクチンを接種するという考えは、現在はHIV感染児や移植児へのワクチン接種に応用されています。

神谷先生の大きな転換期は、1980年のフィラデルフィア小児病院感染症科・ウイスター研究所への留学でした。この留学にはウイスター研究所におられた古川先生(金沢医科大学名誉教授)に大変お世話になっています。フィラデルフィア小児病院感染症科のDivision Chiefは、風疹ワクチンRA27/3を開発したPlotkin教授であり、当時はサイトメガロウイルスワクチン(Town株)、水痘ワクチン(Oka株)、ロタウイルスワクチン(現在RotaTeqとして結実)などの研究を行っていました。神谷先生は1年間という短い期間でしたが、水痘帯状疱疹ウイルス(VZV)感染細胞に対するADCCを見つけられ、ADCC抗体の測定方法を確立されました。Plotkin教授との親交は神谷先生が亡くなるまで続きました。

帰国後神谷先生は白血病患児だけではなく健康な子どもへのワクチン接種にも関心を持たれるようになり、一方では、国際医療協力にもかかわられました。なかでもガーナ野口記念医学研究所プロジェクトは思い入れの深いプロジェクトでした。三重大学小児科、国立感染症研究所などの協力により、野口記念医学研究所は西アフリカの研究所となり、現在は世界各国から研究資金を得て活発に活動しています。国立感染症研究所山崎先生等と行ったポリオ根絶活動も、西太平洋地域(WPR)のポリオ根絶宣言に結実しました。

日本のワクチン行政に遺した神谷先生の大きな足跡は、1994年に行った予防接種法の改正です。当時行っていた予防接種制度が違憲であるという東京高裁の判決を受け、集団接種を個別接種にかえ、強制接種であった定期接種を勧奨接種にしました。予防接種をかかりつけ医の手に委ねたのです。また「予防接種ガイドライン」と「予防接種と子どもの健康」を作成し、医療関係者や国民の啓発にも努められました。当時は多くの小児科医から、「手間のかかる接種方法に替えて」と、反発の声があがりましたが、現

在は神谷先生の指導力を讃える声にかわっています。

神谷先生は1988年9月から2005年3月までの17年間、国立療養所三重病院（現国立病院機構三重病院）の院長を勤められました。この間三重病院・静澄病院・津病院の統合を推進され、また三重病院を療養所から一般病院への変換を図られました。現在三重病院は280床ながら臨床研究部を有する一般病院として活動しています。神谷先生は臨床研究部の充実にも力を注がれ、名誉院長になられても臨床研究部の一員として活動されていました。この3年間の三重病院臨床研究部の評価スコアは国立病院機構144病院中10～12番に位置し、500床以上の総合病院の臨床研究部と肩を並べています。

神谷先生は長い臨床活動、研究活動の中で一度大きな病魔に襲われています。それはC型肝炎ウイルスによる肝硬変でした。家族の強い勧めもあり肝移植を受けることを決断され、2001年12月肝移植を受けられました。その後EBVが関連する胃癌を発症されましたが、これも乗り越えられました。

健康を回復されると研究活動へのモチベーションは高く、インフルエンザ菌b型ワクチンや肺炎球菌結合型ワクチンの日本への導入、沈降インフルエンザワクチンH5N1や組織培養日本脳炎ワクチンの臨床研究、小児インフルエ


ンザワクチン接種量の見直し研究など、次々と研究チームをリードされました。また、2010年からは各種学会から選出された代表者からなる予防接種推進協議会の委員長として、日本の予防接種のあり方について行政に提言されていました。

このように書いていきますと、神谷先生は仕事に生きた人と思われがちですが、神谷先生は根っからの中日ドラゴンズのファンであり、フィラデルフィアイーグルスのファンでもありました。多くの医局員は、中日の負けが続いたときは近寄らないようにしていました。また、神谷先生はクラシック音楽に造詣が深く、定年退職後は自宅の米倉を音楽ホールに変え、仲間と一緒に音楽を楽しんでおられました。

神谷先生が御逝去された今、神谷先生が日本の予防接種研究、予防接種行政に遺された足跡の大きさに畏敬の念を覚えます。神谷先生は最後まで日本で開発された水痘ワクチンの定期接種化と、より効果のあるインフルエンザワクチンの開発に情熱を持っておられました。遺された私達は、神谷先生が目指しておられたワクチン予防可能疾患、特に水痘ワクチンの定期接種化を目指して頑張ります。暖かく見守って下さい。

合掌

故 神谷 齊名誉院長 御略歴

1939年8月18日	名古屋市に生まれる	
小学生時代	安城市に転居	
1964年3月	三重県立大学（現三重大学）医学部卒業	
1965年4月	三重県立大学小児科（井澤 道教授）に入局	
1969年7月	三重県立大学大学院研究科修了（小児白血病免疫療法の研究）	
1970年9月	南牟婁民生病院（現紀南病院）小児科医長	
1972年3月	三重県立大学医学部助手（白血病児へのワクチン研究開始）	
1976年7月	国立療養所三重病院小児科医長	
1978年5月	三重大学小児科講師	
1980年10月	フィラデルフィア小児病院感染症科・ウイスター研究所留学	
1981年12月	三重大学小児科助教授	
1988年9月	国立療養所三重病院（現国立病院機構三重病院）院長	
1994年8月	第4回日本外来小児科学会会長	
1999年	第3回日本ワクチン学会学術集会会長	
1999年12月	ガーナ大学より「長期医療協力功労賞」受賞（ガーナ大学野口記念医学研究所の国際医療協力）	
2000年	第48回日本ウイルス学会学術集会会長	
2005年4月	国立病院機構三重病院名誉院長	
2005年4月	三重県予防接種センターセンター長	
2005年	第37回日本小児感染症学会会長	
2006年10月	日本ワクチン学会より「第一回高橋賞」受賞（水痘ワクチンの研究および各種ワクチンの普及啓発活動）	
2007年12月	厚生労働大臣表彰「第35回医療功労賞」受賞（予防接種の普及活動）	
2011年2月22日	御逝去（享年71歳）	

神谷 齊先生

代表的な厚生労働省・文部科学省等の委員（2010年度時）

日本ポリオ根絶委員会委員、インフルエンザワクチン需要検討委員会委員長、厚生科学審議会感染症分科会臨時委員、感染症研究推進委員会委員、独立行政法人医薬品医療機器総合機構専門委員、財団法人リサーチセンター理事、日本医師会感染症危機管理対策委員会委員、予防接種推進専門協議会委員長、三重県医療審議会委員